嘘と珈琲

らんちゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嘘と珈琲

【Ｎコード】
Ｎ６０４３Ｙ

【作者名】
らんちゅ

【あらすじ】
恋姫の世界に来た京理、黄巾の乱や反董卓連合の戦いを経て辿り着いた先には何があるのか。

※前作『夢の跡』の続編になり、設定を引き継いでいますのでそちらをご覧になられてから見ていただけると良いかと思います。

チャイルドシート（前書き）

第2部はじまりはじまり～

チャイルドシート

???　side

無駄に長いここがどことかそういう堅苦しい事は後で説明する。
いや、そうせざるを得ないので勘弁してください。

「ちょっと、あまり動かないでもらえるかしら？座り心地悪くなったんじゃないかしら？」

「・・・。」

何故なら俺の膝の上に乗ってるサド気質旺盛なこの女王様を何とかしたいから。
てか、乗ったの初めてだろ？そもそも人間の座り心地が悪いってなんですか・・・。

「――――っ。」

それを微妙に苦々しく微笑みながら見る周りの皆さん。
桂花もその内の一人だが華琳にゾッコンの思いと板挟みになってるらしく、頭を抱えてあたふたしている。
とある２匹？の小動物のようで凄く・・・可愛いです。
いや、普段の行動からするとこっちの方がレア度があるからその分上か。
俺の副長である莉羅と星は場所等関係無く怒り猛っている。
それさえ無ければ星はともかく莉羅は完璧なんだがね。
星はそれに加えてメンマ話を控えて貰おうかな。部屋に缶詰にされて８時間耐久とか勘弁してくれ。

今、莉羅と星を副長と言ったが正しくは違う。俺は常に隊を持っている訳ではないので側近という言葉がピッタリかもしれない。

「ちょっと、足動かさない！」

「・・・はい。」

私、宮（みや）　京理（きょうり）２０歳。
天の世界では成人を迎えるお年頃、と同時に別の大人への道に目覚め、もとい強制連行されそうです。
は！？まさか尻に敷かれるとは、この事を言うのか。
それの更に発展したものが・・・皆まで言うまい。
まさか人生の中でそんな事を知る事になるとは。人生一寸先は・・・。

「で、俺はいつから華琳の椅子に？」

忌々しい金髪ドリルに話しかける。

「いつまでも、よ。というより椅子と分かっているんでしょう？話す椅子なんて聞いた事が無いけれど？」

そんな事をデススマイルで言う。こいつは本気だ。
だけど、そんな笑顔でも可愛いんだよ、クソ・・・。

「そう？天の国では喋る椅子はデフォ、当たり前だよ？標準装備。」

そういえば、ここからじゃ見づらいが椅子に座っている俺に座っているせいでおそらくというか絶対に足が地面に付いてない。

「ぷっ。チャイルドシートみたいだ。」

色々小さ――

ギュ！！

「ぎゃあああああああああああああ！！！！」

「あら？だから急に暴れないでもらえる？また座り心地が悪くなるわ。」

ケツを思いっきり抓られた。

迂闊だったぁ！ついこっちに来てからのいつもの癖で横文字で悪口を言ってしまった。

他の人は？マークを頭に浮かべるだけなので大丈夫なのだが残念ながら一刀と華琳には通用しない。

と、丁度良い。これについて多少掻い摘んで説明しようか。

長安、虎牢関の戦いにおいて俺達は負けた。正確には闘って負けたのではなく降伏という形でだが。

策に嵌ったとはいえ既に居ない人物を攻めたという恥を諸侯達は知られたくない為にそれは極秘にされた。

そして、詠や華雄に猛反対にあったが俺達が負けを認め降伏する事で諸侯達は確かに風評と言う物を得る事が出来た。

ここが華琳の凄い所だ。策に嵌めておいておきながら諸侯達は本来の目的である風評を『恥の上塗りをしていた』とはいえ得た為、強く言えない。

これが俺と華琳の共謀でした、というのなら話は簡単だったが今回諸侯達は結果として自分達が欲しかった物を手に入れている。

特殊なタイプの飴と鞭、だろうか。

簡単に言えば、貴方達を騙しました、でも私のおかげで風評は手に入ったでしょう？というスタンスだ。
そこには、それを横暴だ！というのなら亡き董卓を攻めた上、私の掌で踊らされていたお馬鹿さんという事を言いますよ？という事を暗に仄めかしている事も含まれている。
諸侯達は董卓を討伐したかったのではなくその副産物である風評を得たかったのが、華琳には分かっていた。
劉備のように本当に国の為、ひいては民の為を思っていた者も居たが大半は風評が目当てだったのが事実である。

華琳を悪者だ！と言う＝自分も悪者です！
と言った式が出来上がっている訳だ。

華琳こえー

と、言ったらまたやられそうなの――
ギュゥ！！

「ぎゃあああああああああ！！！！」

はい、完全に心読まれてました。

閑話休題

会議で俺達は生きる為に降伏と言う形を選んだ。
事実、あそこで俺が諸侯を皆殺しにしようが数の暴力には敵わない。

おそらく両側から軍を前に進めるだけでこちらが壊滅するのは目に見えていただろう。
諸侯の、自分の命惜しさに賭けたが華琳が居る時点でアウトだった。
少し意外だったのは鮑信もそれに気付いていたという事だが。
ともかくその時華琳は独断で俺達を華琳の傘下に入れる事を条件に出した。

もちろん反対の嵐だったが、俺自身がＯＫを出したのと手柄を曹操軍が全て放棄する事で合意に至った。
これは桂花と風の考えらしいが、今回の戦いで俺の価値を再確認出来たらしくそれに比べれば今回の風評等ちっぽけな物らしい。

最後まで反対した人物？それはもちろんその意味を知る鮑信。
何度も他の諸侯にその危険性を伝えていたが、既に目的の物を得てもう曹操に関わりたく無かった諸侯には分かってもらえずそのまま多数決で決まった。
で、今居るのがここ、許昌という訳だ。

俺はあった事知った事を全て詠達に告げると、曹操は本当に同じ人間か？って返事が返ってきました。

正直、今までの話は俺にとっては本当にどうでもいい。

華琳が姉であるかどうか、これだけを聞きたかった。
が、許昌に着いてからからいきなり膨大な書簡（全体のおよそ１／４）を俺にだけ渡され、それを全て処理するのに２週間ほど掛かった。
朱里や雛理、一刀等色々な人物が差し入れに来てくれた。

だが、ある一部の人物は自分を差し入れと評してそこら中から侵入してきたのは全然些細じゃない余談である。

それをようやく終えたと思ったら

『大した早さね。さて、次は椅子になりなさい。』

そして現在に至る。

「華琳、お前は俺の姉・・・で良いのか？」

急にそんな事を口走ってみる。

「違うわ。」

・・・。

「私はそんな事一言も言ってないけれど？」

口調は違えどこのサド気質でいやらしい嫌がらせをしてくるこの少女、絶対姉さんだ・・・。

が、その後も得意の話術で言い包められて結局未だに確証は無いのが現状だ。

「さて、とりあえず皆自己紹介は済んでいるわね？」

マジな声を出しているがそれが俺の膝の上から発せられているのは何だか悲しい。

「あのさ？話の前にそろそろ降りない？」

「嫌よ。」

「一応聞くけどなんで？」

「貴方は私の物でしょう？」

想像通り過ぎて泣いた。

チャイルドシート（後書き）

感想、評価よろしくお願いします。

しばらく拠点の話が続きます？

憂鬱（前書き）

2話目です。
感想・評価ありがとうございます。

憂鬱

雪蓮　ｓｉｄｅ

「あ～、むかつくわね。」

降伏の件で京理含む董卓軍は華琳の下に付く事になったが、袁術と私達は自由にしていいと言われた。
今考えても腹が立つわね！
曹操の、まるで京理さえ手に入れれば私達は目に掛けるまでも無いというようなあの態度、無理矢理京理強奪すれば良かったわ。
だけど、もっと気に食わないのはそれを京理が認めたという事よ。

「姉様、日頃から言葉は選んでください。」

「はいはい、口うるさい妹ね。全く誰に似たのやら。」

「何か言ったか？」

振り向くとそこには我らが軍師、冥琳がいた。

「何でも無いわよ。」

・・・口うるささで言えば我が軍の２大人物ね。

「また、京理の事でも考えているのか？」

ニヤリと口を歪ませながら言ってくる。

「ええそうよ！あ～もう曹操もムカつくけど京理はもっとムカつくー！」

「はぁ。雪蓮、こうは考えられないか？」

「何よ？」

「私達には孫呉の再興という目標がある。唯でさえ袁術の下で客将なんかをやっているというのに今回の戦いで風評すら失ってしまったら我々はどうなる？」

「あ・・・。」

「絶対に勝てると言って誘ってきたのは向こうだ。
であればこんな結果になった今、周りに宮　京理としての敗北と曹操への降伏をこの戦いの表顔とする事で、それを印象付け、我々への意識は確実に小さくなる。
何しろ、あんな事があったなら諸侯達は尚更だ。」

「・・・でも。」

「お前も、京理の意図が知りたくて今もここに居るんだろう？」

・・・そう、私達は今許昌に居る。
あの戦の後、曹操に無理を言って付いてきたのだ。
だって、勝手に言われて納得できる筈無いでしょう？
それに京理と仕合うのだって楽しみだっていうのに。
まぁ、確かに曹操の下に付くのは苦痛だけどね。
ただ私の戦心が京理を求めて仕方無いのよ。

だって、冥琳より頭が良いかもしれない上に武勇においてはあの呂布をすら凌駕するんでしょう？
絵に描いたような最強。武人がこんな人間に興味を持たない筈がない。

京理　ｓｉｄｅ

不幸とは突然やってくる。

「という事で明日昼前から仕合するから。」

こんな風に・・・。
ノックもせずに部屋に入ってきた途端そんな事を言いだす江東の虎の娘。
ああ、そういえばそんな習慣無いんだっけか。

「一言目がそれか。拒否権は？」

「無いわ☆」

キラッ、じゃねーよ・・・。

「で、華琳はそれについてどう思――」
「許可。」

「・・・さいですか。」

一縷の望みに賭けたけど案の定でした、はい。

「ふふ、ただし孫策よ。」

「何よ？」

名前を呼ばれて明らかに不快そうな顔をする雪蓮。やっぱり降伏には納得してないからか敵意を剥き出しにしている。
普通の君主ならその時点でアウトだが流石華琳、器がでかいよ。

「どうせなら大会を開きましょう。京理と戦いたいって人間は貴女だけじゃないのよ。」

「は？」
「形式は？」

「そうね・・・。トーナメント、勝ちあがり形式がいいわね。」

「あの――」
「場所と日時は？」

「追って連絡するわ。」

「ちょっと――」
「分かったわ。」

今までの話、雪蓮が部屋に入ってきてからほんの１５０秒ほどの出来事でした・・・。

「・・・あの、華琳さん？」

「何かしら？」

斜め前に座っている華琳を見ると恍惚とした表情をしていた。
そう、昨日ようやく喋る椅子を卒業する事が出来た俺は２週間振りに膝の上に何も乗せない生活を送れている。
って、そんな事は今はどうでもいい！
どうでも良くは無いけれどこれに比べれば！

「ルールはどうするんだよ？」

「形式はさっきの通りで、大会優勝者が京理への挑戦権と１日デート権を得る。
立ち位置的にはスーパーチャンピオンってところね。」

横文字に横文字で答える華琳に違和感を感じなくなったのは俺が変になったからだろうか。
って・・・。

「１日デート権！？なんだその券みたいなのは。
天の国では人権ってのがあってな、それによると俺にも拒否権という物が――」
「ここは漢よ？」

「・・・そうですね。」

話術じゃ勝てねぇ・・・分かってたけど。
思えば話術だけなら華琳が最強、次点で風などが入るが俺にはそこまでの話術は無い。

てか、急展開かつテンプレ過ぎて何か付いていけないよ・・・。
とりあえず、参加できない文官の反発は凄そうだな。
なんて今でも客観的に考えていられる俺は凄いと思う。

莉羅　ｓｉｄｅ

「せいっ！」
「やぁ！」
「うるぁ！」
「ぶるぁぁぁ！」
「たぁ！」

最近妙に鍛錬場の使用者が多いと思ったら成る程、そういう事ですか。

城内にある貼りだしを見ると『天下大会』の４文字。
何の飾りも無いその言葉に感動を覚えました。
曹操殿、これは京理様争奪戦と考えていいのですよね？
そう考えると不思議とニヤけてしまう。

見た感じで出場しそうなのは愛紗、鈴々、星、恋、華雄、夏侯惇、夏侯淵、許チョ、典韋、楽進、雪蓮、孫権、黄蓋、甘寧、周泰と言った所でしょうか。

私も含めて１６名・・・かなり多いですね。
目的としましては、京理様に対して不埒な考え（色恋事含む）を抱

いている輩を排除する事。
それに、もし優勝できたなら合法的かつ白昼堂々と・・・ヤれる。

憂鬱（後書き）

莉羅に対して一言
「今日のお前が言うなスレはここですか？」

戦闘シーンを描けない作者自身に喝を入れるかの如く無理矢理大会を開催するという暴挙に走ってみました。
夢跡では文官の活躍が多かったので今回は武将にスポットをあててみます。

感想、評価よろしくお願いします。

前夜考察（前書き）

前話の調練場に一人変な声が（ｒｙ

前夜考察

華琳　ｓｉｄｅ

桂花を閨に侍らせている中、ふと気になった。

「桂花、貴方はどう見るかしら？」

「大会の事でしょうか？
でしたら呂布を筆頭に関羽、張飛、趙雲、孫策、馬鹿猪。この辺りが上位に食い込んでくるとは思います。
ですが、この戦いにおいて優勝するとしたら・・・私は羊コと考えます。」

急に決まった催しだったが真桜に無理を言って徹夜で会場を作ってもらった。
よって、大会は明日から行われる。

「羊コ？あの京理の側近の？」

「はい。」

文武両道の王道を往くようなイメージだったのだけれど・・・。

「理由を聞かせてもらえるかしら？」

「・・・あの人物はそもそも人の下に付くような人物ではありません。」

「なぜそう思えるのかしら？そして勝つと思われる根拠を聞かせて頂戴。」

「羊コの背中を見た事が無いからです。」

「それは文字通りの意味？」

「はい。」

武人でも無い文官である桂花がそう断言できるのだから余程の事なんでしょう。
確かに私も一度も見た事が無かったわね。
普通に生活していてそんな状況には成り得ない。
隙を見せないにしても少し異常だ。
それを自然に出来るのだからかなりの鍛錬を積んだんでしょうね。

何の為に？
それは分からないけれどそうせざるをえない状況にあったか、この乱世の中で必要だったから、はたまた愛する者の為に・・・なんてね。

「で、それが今回の大会にどう関係するのかしら？」

「その羊コが異常な執着を見せる程の人物が言わずと知れた京理様です。そして羊コはその半国の器の名に恥じぬ所かそれ以上の結果を出した人物とずっと一緒に居た。
・・・純粋な武で言えば京理様を除けば呂布が頭一つ抜けています。が、経験というのは得難い物です。それがいずれ英雄になるお方の側に居たというのなら尚更の事。

華琳様、これは私の願望ですが。

戦ではなく、一対一の戦いにおいて知が武を上回った時、その先に何があるのか私は見たいのかもしれないです。
それが私にとって何の意味を為すかは分かりませんがこの先の私が華琳様の支えになる時の一つの鍵になる気がします。」

「えらく評価するわね。」

「文官の私が何と言えばいいのか分かりませんが、知力はもちろん純粋な武においてもあの女はかなりの物の気がします。」

「能ある鷹は爪を隠す、という事かしら？」

「予想としましては呂布に及ばずともそれに近い力を有している気がします。」

これは驚いたわね。
軍師は希望的観測はほとんど言わない。特に桂花のような者なら尚更だ。

羊コはここに居る中でおそらく一番京理を支えてきた人物。
隠してきた実力、そして京理との生活の中に何か得る物があったとしたら？

ふふ、これは丁度良いわね。
今回が皆の実力の良い指標になるかもしれないわ。

「桂花、明日が楽しみね。」

「はい。」

外を見ると太陽が１日の仕事を終え、辺りは完全に黒に染まっていた。

京理　ｓｉｄｅ

「ふぅ・・・。もうこのパターンやめようよ、ねえ。」

小鳥の鳴き声が朝を報せる。

体を起こすといつもの如く当たり前のように俺の部屋に侵入している星と莉羅、それに風、恋、朱里、雛里＋数匹。

前までは詠や桂花、愛紗や桃香も居たが詠はここの所ずっと部屋に引き籠っているのが、少々気がかりだ。

桂花は華琳と夜の・・・。

まぁ、それは置いといて、最近は鍵をかけると毎朝ドアノブが切り取られた状態で発見される→修理、これの繰り返しになるのでもう完全にオープンにしている。

が、それを受け入れるという意味と勘違いされたらしく政務も俺の部屋に持って来てやろうとする位だ。

勘弁して下さい・・・。てか、物理的に無理だからね？８畳だよ？ここ。

そういえば、あそこに居た頃はもう一人居たな・・・。

守る事も出来ず最期を見る事も叶わず、そして俺達が負けた事で冤

罪も冤罪で無くなり

・・・俺はあの子に何をしてあげられたのか。否、何もしていない。理想だけを追い求める者は理想を抱いて死んでしまえばいい。みんなを守る事とある一人の少女の疑いを命を賭けて晴らす事、それは天秤にかけていい物でもないし比べる物でもない。でも、心のどこかでそういう風に自分を言葉で覆ってしまってるっていうのは、闘う前から諦めたって気持ちがあるって事なのかもしれない。自分が思ってる事なのに・・・分からないよ。

「・・・朝から悲しそうな顔をしていますな。主を笑顔にするのも側近の役目ですからここは元気になる事をしなければ。」

ニヤリと笑う星。

「その通り、ですがそれは私の役目ですよ？星。」

・・・いや、半裸でそんなこと言ってんじゃねーよ。

「お兄さん、今日は何丼ですかー？」

「そんなこと言うんじゃありません！」

こんな子に育てた覚えは無いぞ！

「おうおう兄さん――」

「黙れＨＯＵＫＥＩ！言わせねーよ？」

※あくまで風の頭の上（ｒｙ

とりあえず、奴が喋る内容はロクな物が無い。

「あ、あのでしゅね！私達は――」

ペロペロ

「であって――」

ペロペロペロペロ

「・・・嫌い？」

ペロペロペロペロペロペロ

「ごめん、セキトに周々、善々俺が悪かったよ。嬉しいからもうやめて？」

朱里と雛里はペロペロ音で掻き消され、恋に至っては何の事を言っているのかまるで意味が分からない。

という事で

「嫌いじゃないよ。」

って言うしか無くなる。

そして許昌に来てからこのやりとりを毎日続けている。

朝の時間濃すぎるだろ・・・。

ちなみに恋のペット達はここに来る時に、パンダ達は戦に付いて来ていたらしいので俺の部屋付近は軽い動物園である。とりあえず周

泰が良く来るけど、たまに甘寧が見れる。
それを眺めるのが俺の数少ない心のオアシス的存在になっている。
ていうか・・・

「何で雪蓮まで居るんだよ・・・。」

とりあえず一通りツッコミを終えて冷静に考えたら普段居ない奴が居た。

「スースー。」

おやおや、孫呉の王様は良く寝る子なのね。
・・・雪蓮と恋は戦になると人が変わるからねぇ、ちょっと得した・・・のか？

「普段も可愛いけど寝顔は見物料取れるなぁ。」

ダメだこりゃ、周りに可愛い女の子がいっぱい居るともうそういう目でしか見れなくなってきそうだ。

これから始まる大会の事を考えてみた。

「誰が優勝するんだろうねぇ。」

1番闘ってみたい相手・・・と言ったら実は杜預なんだけど出るかも分からないしやっぱり決勝は恋かなぁ。

「ふ、そんな物。私に決まっているだろう！」

声の主はバンッ！と大きな音を立てて扉を吹っ飛ばして入ってきた。

「・・・朝から元気ね、華雄。」

ハハハ、これで扉の修理費また華琳に借金ダヨ・・・。

ともかく、月。俺はみんなと元気にやってます。
お前もここに居れば、とかそういう事は口に出さないけどやっぱり

会いたいよ・・・。

前夜考察（後書き）

ネタ路線でいこうとしたらいつの間にかちょっぴりシリアスになってました。

次回から戦闘描写となりますが過度な期待は禁物です。
で、誰と誰とを闘わせるかまだ全然考えてないんですが希望あればお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6043y/

嘘と珈琲

2011年11月20日18時38分発行